

Y2-20

東日本大震災救護員の資器材 ～管理・運用・補充について～

名古屋第二赤十字病院 医療社会事業部社会課
寺田 麗、向山 憲男、佐藤 公治、
井嶋 廣子、寺西美佐絵、永田ゆかり

平成23年3月11日（金）14時46分東日本大震災が発生し、当院からは発災後3時間半で救護班（初動班）6人とDMATチーム5人が救急車2台で東北方面へ出発した。その2日後、3月13日（日）第2班救護班7名が派遣され、また2日後の15日（火）には第3班救護班7名と石巻日赤病院支援要員3名が派遣された。その後続々と救護班チームが派遣され、多い時で29人の救護員及び支援員を同時期に派遣し、5月末の時点で194人の職員が被災地へ派遣された。特に福島原発爆発による放射能汚染や移動手段が救急車から飛行機、そして新幹線へ刻々と変わっていった。その状況にあわせて、救護班及び病院支援班に持参させる資器材の準備と片付けが連日続いた。送り出すときのプリーフィング、帰院者からのデプリーフィングを密に行い、次回派遣者への準備へ繋げていった。発災後の救護班を派遣するための資器材管理において直面した現状と課題を考察し、この震災での資器材運用方法について取り組んだ事、及び今後災害発生時への対応の更なる改善へ向けての検討課題を報告する。

Y2-21

大阪赤十字病院 dERUにおける設備 ～院内設備との融合～

大阪赤十字病院 国際医療救援部
弘川 摩子、次田 順司、清水 亮平、
中出 雅治

【目的】平成22年度のdERU整備に際し、大阪赤十字病院国際医療救援部では、テント及びテント内設備について、救護員が活動しやすいdERU、をコンセプトに整備した。救護員は普段病院職員であるため、彼らが活動しやすい環境というのは、dERUをできるだけ病院内に近づけるということである。

【内容】室内温度管理を充分にするため、エアテントではなく、米国製DRASHテントと専用の冷暖房機を採用した。これは二重構造になっているため、冷暖房が効きやすく、また寒冷地では暖房しても内側に結露がでにくい。医療資器材、薬剤をいれる箱は、dERU用に特注するのではなく、病棟で使用しているカートや点滴台をそのまま装備した。ベッドはストレッチャーを使用。モニターは救急センターで使用しているものを、酸素は在宅酸素で使用している酸素濃縮器を搭載した。

【結果】収納棚関係を普段院内で使用しているカートにしたため、医療職、特に看護師、薬剤師が違和感なく活動できる環境であった。また、メーカーとのリース契約をしたバッテリー搭載型の酸素濃縮器を常にdERUに搭載しているため、今回の東日本大震災においても持参し、喘息発作の点滴中など、酸素ボンベでは困難な長時間の酸素供給にも対応可能であった。